

[論文]

出口王仁三郎『霊界物語』とキリスト教

——キリスト教土着の一事例として——

川 島 堅 二

はじめに

この論考の目的は、教派神道系の新宗教である大本教が、日本に土着したキリスト教だと示すことである。これは、かつて武田清子がキリスト教の土着論の脈絡において、当初キリスト教徒でありながら棄教して、古神道の熱心な信者となり、その信念に基づいて「皇国農民」教育に専念した加藤完治を論じたが¹、それと志向性としては幾分類似するところがある。後述するように大本教の創始者である出口王仁三郎も一時、キリスト教に親しく接近しながらやがて離れ、教派神道系の新宗教を起こした人物だからである。しかし、加藤完治の農民教育運動とは異なり、出口王仁三郎が創始した大本教には、その本質的な部分においてキリスト教の倫理や教義（十戒や使徒信条）が取り入れられている。加藤完治はキリスト教の背教者だが、出口王仁三郎はそうではない。むしろ彼は古神道を換骨奪胎し、装いこそ神道の神々の世界だが、その内実はキリスト教という教団を創始したのである。

1. 大本教について

1-1 出口ナオと「お筆先」

先に大本教は出口王仁三郎が創始したと述べたが、正確には大本教には二人の教祖がいる。出口ナオと王仁三郎である。両者の関係はキリスト教でいえばイエスとパウロの関係にたとえられる。宗教学的に言えばイエスはキリスト教の創唱者であるが、パウロなしには宗教としてのキリスト教の成立はなかった。イエスは書かれたテキストをまったく残さ

¹ 武田清子『土着と背教—伝統的エトスとプロテスタント』新教出版社 1967年 p. 271 以下

なかったが、そのイエスの教えをユダヤ教の律法学者であったパウロが体系的に叙述し、その過程でユダヤ教の枠を超えていくことで、キリスト教は成立していく。

同じことが出口ナオと王仁三郎の関係においても言える。大工職人の夫との間に三男五女の子に恵まれたナオだったが、夫が事故で半身不随になってからは極貧の生活に落ち、さらに長女と次女が嫁ぎ先で次々と病に侵されるなどの絶望的な状況の中でナオのいわゆる神がかりが起ったと言われる。ナオの口からナオとは全く別の声音で「良之金神」^{うしとらのこんじん}を名乗る活物^{いきもの}が語り始める。そしてその活物とナオとの間で以下のような対話が始まったという²。

活物「わしは良之金神であるぞよ」

ナオ「そんな事言ふて、アンタは妾を瞞しはるのやおまへんかい？」

活物「わしは神じゃから嘘は吐かぬワイ。わしの言ふ事、毛筋の幅の半分でも間違ふたら神はこの世におらんのじゃぞよ」

ナオ「そんな偉い神さまどすかい。狐や狸が瞞してなはるねん御座へんかい」

活物「狐や狸では御座らぬぞ。この神は三千世界を建て替え建て直しする神じゃぞ」

このようなナオは、当初、精神の病に侵されたとみなされ、親類の者によって座敷牢に入れられてしまう。しかし、やがてその牢の中で、無学で文字など習ったことのないナオが釘で壁にカナ文字を刻み始める。それが後に大本教の最初の教典となる「お筆先」の始まりである³。

このナオの周囲にやがて信者が集まるようになり、「お筆先」は半紙に墨字で記されていくが、句読点の一切ないカナ文字であるため、いかようにも解釈が可能なテキストである。やがてナオの娘婿となった王仁三郎はこれに漢字をあて句読点をつけ、意味の明確なテキストに変換していくことになる⁴。ナオがカリスマ的な教祖とするなら、王仁三郎は自らの博識と教養によって、ナオが受けた啓示を解釈し宗教的なメッセージへと翻訳したのである。ナオと王仁三郎の関係をイエスとパウロの関係にたとえたゆえんはこれである。

² 安丸良夫『出口なお』朝日選書 329, 1987年 p. 83, 84

³ 大本七十年史編纂会『大本七十年史上巻』p. 90

⁴ 「お筆先」の成立事情の詳細は安丸良夫前掲書 p. 107, 108 を参照

1-2 「お筆先」の内容とその影響

「お筆先」の内容は、記紀神話を土台とした神々の抗争と世直しの使信である。ナオに啓示した「良之金神」は古事記の神々の系図では国常立尊くにとこたちのみことという名前が出てくる神であるとされる。この神は、古事記では系図に名を残すのみだが、大本教が伝える神話によれば、非常に厳格な正しい神であり、悪い神々を肅正しようとして逆に神々の恨みを買ひ、良の方角（京都地方からみて東北の方位）にある舞鶴湾沖の雄島おしま（現在の冠島かんむりじま）に閉じ込められてしまったとされる。その国常立尊が数千年の時を経て、「われよし、強いもの勝ち」の明治の日本を立替え立直すために、ナオの身体に再臨したというのである。

したがってナオを通して語られ「お筆先」に記録されたメッセージは過激な世直しと社会変革を訴える内容である。たとえば次のようなものだ。

「神が表に現れて、三千世界の立替へ立直しを致すぞよ、用意を成されよ。この世は全然さっぱり、新つさらの世に替へて了しまふぞよ。三千世界の洗濯、大掃除を致して、天下泰平に世を治めて、万古末代続く神国の世に致すぞよ」（明治25年旧暦の正月）⁵

西洋に倣って近代化を進める明治政府も齒に衣着せぬ言葉で批判される。

「外国の獣の真似を致して、牛馬の肉を喰くったり、洋服を着て神の前を憚うろつらず彷徨いたり、一も金銀、二も金銀と申して、金銀で無けら世が治らん、人民は生命が保てん様に取違とりちがひいたしたり、人の国で有ろうが、人の物で有ろうが、隙間さへありたら略取とることを考えたり、学さへ有たら、世界は自由自在に成る様に思ふて、畜生の国の学まに深はまり致したり、女と見れば何人でも手に懸めかけけ、妾あしかけや足懸を沢山に抱えて、開けた人民の行やり方と考えたり」（明治31年旧5月5日）⁶

このような社会批判も大本教団が地方の弱小集団である限りは、社会的影響力もさしたるものではなく、政府の目に留まることもなかったであろう。しかし、大正時代に入ると教団は爆発的に教勢を伸ばすことになる。このあたりの事情を『大本七十年史』は次のように記している。

「大正初年における大本の信者数は千人にみえない綾部の一地方教団にすぎなかった。

⁵ 村上重良（校注）『大本神論 天の巻』東洋文庫 347（平凡社）1979年 p. 3

⁶ 同上書 p. 15

しかし、第一次世界大戦後の変動期において、大本は異常なまでの成長をとげた。(中略)綾部の本宮山に神殿を造営し、亀岡城址を購入して大道場を開設し、さらに日刊『大正日日新聞』を経営するなど、教団の諸施設をととのえながら、その教線を全国的に伸長させていったのである。それはまさに爆発的な成長ぶりであった⁷。

時代状況も教団を後押しした。第一次世界大戦を契機に生産工場規模の増大、それに伴う労働者の急増、物価の高騰などにより社会的格差も広がり、米騒動などが起こった。1919年(大正8年)には流行性感冒(インフルエンザ)により15万人が死亡、社会不安の増大をさらに招いた。大戦の終結とともに戦後恐慌がおこり、主要商品の価格はいっせいに値崩れを示し、生糸や綿糸は暴落、1920(大正9)年だけで銀行の取り付け騒ぎは169件、大商店の破産は285件にもものぼったという⁸。世直しを説く出口ナオのメッセージはリアルな現実として人心を捉えたのである。

この時期に大本に入信した人物に浅野和三郎がいる。東京帝大(当時)の英文科卒で横須賀の海軍機関学校の英語の教授であった彼は、自分の息子の不治の病が祈祷により治癒したことをきっかけに宗教的世界に目覚め、40代半ばで教授職を辞し、家族で大本に入信、京都の大本本部に移ることになる。この浅野の影響で少なからぬ軍関係者が大本に入信するものもこの時期である。

このような大本教団について、当時の衆議院で安藤正純代議士は「1919(大正8)年に二万五千人であった信者が一年間で三〇万人と号するに至った」と述べ「それは政府の取りしまりよろしきを得ざるためである」と政府の対応を批判している⁹。

1-3 第一次大本事件

急成長を遂げる大本教団を、京都府警察は1919(大正8)年から密かに調査を重ねてきたが、1921(大正10)年の1月、平沼検事総長から最終的な命令が発布されると、不敬罪ならびに新聞紙法違反の容疑で検挙する方針が立てられ、同年2月12日早朝、大本本部ほか関連施設数か所を武装警官200名が家宅捜索し、出口王仁三郎他3人の幹部を検挙した¹⁰。これが第一次大本事件である。

この事件を機に浅野和三郎は大本を離脱。その審理中に大正天皇の崩御があり、1927(昭和2)年5月17日、王仁三郎、浅野ほか1名は、「大赦令」で免訴の判決を受け、6年余

⁷ 前掲『大本七十年史上巻』p. 513

⁸ 同上書 p. 518

⁹ 同上書 p. 514

¹⁰ 同上 p. 566f.

に及ぶ事件はいちおうの終息をみることになる。しかし、このことは教団の運営にとって危機的状況を招く。綾部の本部には人足が途絶え、教団は経済的にも困窮する状況に追い詰められる。この世に対して「立替へ立直し」を迫ってきた教団は、教団自体の「立替へ立直し」を迫られることになったのである。このときに王仁三郎が決意したのは教典そのものの一新だった。こうして『靈界物語』の口述が始まる。

2. 出口王仁三郎と『靈界物語』

2-1 王仁三郎のユーモアと人権感覚

出口王仁三郎には一種独特のユーモアと人権に対する感覚があり、それは今日の大本教にまで受け継がれている。

大本教の月次祭で必ず唱えられる「^{かみこと}神言」に、人の世の「罪のリスト」ともいうべき次のような一節がある。

「^{くに}国津罪とは ^{いき}生はだだち ^{しに}死はだだち ^{しら}しらひとこくみ ^{おの}己がははをかせる^{つみ}罪 ^{おの}己が子をかせる^{つみ}罪 ^ははと^こ子とをかせる^{つみ}罪 ^こ子とははとをかせる^{つみ}罪 ^{けもの}畜をかせる^{つみ}罪」¹¹

この原型は804（延暦23）年の『皇太神宮儀式帳』で、そこにはやはり人がこの世で犯す「罪のリスト」が若干項目の異動はあるもののほぼ同じ内容で次のように記されている。

「國都罪（中略）母犯罪己子犯罪獸犯罪白人古久弥」¹²

読み下すと「國ツ罪トハ（中略）母犯セル罪、己ガ子ヲ犯セル罪、獸犯セル罪、^{しらひと}白人古久弥」である。ここで「白人」とは色素欠乏症等で肌の白くなった人のこと、「古久弥」とは「こぶのできるこ」とある¹³。つまり古代の日本においてはこのような身体の異常を罪障とみなしていたのである。

ところが大本教では「しらひとこくみ」を、不倫に代表される不適切な性的関係と解釈

¹¹ 大本本部編『おほもとのり』平成17年5月5日第56刷

¹² <https://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/h248/image/01/h248s0005.html>（京都大学附属図書館所蔵 平松文庫）

¹³ 高木市之助（監修）『古事記祝詞・日本古典文学大系1』岩波書店1958年424頁参照

するが、その根拠は『霊界物語』にある次の戒めである¹⁴。

いたづら しら ひとくみ なか
「徒に白日床組なす勿れ
かみ みわざ つと わす
神の御業の勤め忘れて」

王仁三郎は、「しらひとくみ」に「白日床組」と当て字をすることで、これを真昼に寢床を組むこと、すなわち昼下がりの情事と読み替えたのである。およそ学問的な解釈とは程遠い読み替えである。しかし、身体の異常や障害を罪障に数えることは、古代社会では普通であっても、現代では許容することのできない人権問題である。これを一流のユーモアで、しかも後述するようにキリスト教の倫理観を接木することでクリアしてしまうのが出口王仁三郎なのである。

2-2 『霊界物語』とキリスト教

このような王仁三郎によって1921-23（大正10-12）年、および1933-34（昭和8-9）年に集中的に口述筆記された全81巻、83冊におよぶ『霊界物語』のあらすじは、今をさかのぼること35万年前、神の都エルサレムを拠点とした国常立尊の神政とその終焉、日本の地への尊の隠退に始まり、終末的諸相を呈する地球世界を救い清めるために、宇宙創造の主神スサノオが地上に降臨。八頭八尾の大蛇、金毛九尾の悪狐などの悪霊に憑かれた人々を救う活動が世界各地で展開されるという壮大なファンタジーである。

出口ナオの「お筆先」の中心的なメッセージであった現実社会に対する批判は『霊界物語』では影を潜める。「大赦令」により釈放されたとはいえ、教団の発行物は当局による厳しい検閲下にあった。現実離れたファンタジーを枠組みにすることは当局の追及を巧みに逃れる方便であったといえるだろう。

それでは『霊界物語』の宗教的世界観はどのようなものであろうか。出口ナオの「お筆先」のそれが『古事記』に代表される日本の記紀神話であることは先述したが、そこにキリスト教の救済史観（使徒信条）と倫理（モーセの十戒）が接木される。以下は両者の比較対照表である。

¹⁴ 出口王仁三郎『霊界物語』「山河草木（丑の巻）」第23章478。

『霊界物語』「山河草木（丑の巻）」第23章	使徒信条
<p>あ、吾は天地の造り主、全智全能の誠の御祖神天国常立之大神を信ず。</p> <p>その聖き美はしき大御霊より現はれ給ふ厳の御霊、瑞の御霊の二柱、聖霊に導かれて綾の高天原に降らせ給ひ、現世のあらゆる苦しみを受け、厳の御霊は奥津城に隠れ給ひ、稚姫君の御霊と共に天津国に上りまし、地上の総てを憐み恵ませ給ひ、又瑞の御霊は千座の置戸を負ひて黄泉に下り、百二十日あまり六日の間虐げられ¹⁵、再び甦りて綾の高天原に上り、無限絶対無始無終の皇大御神の大御恵を伝へ、又生ける人と死れる人の霊を清めむが為めに、神の御使として勤み給ふ瑞の御霊の神柱を信ず。</p> <p>又吾は大神の聖霊に充たされたる精霊の变性男子变性女子の肉の宮に下り、教の場と信徒の為に限りなき歓喜と栄光と生命を与へ給ふ事を固く信ず。</p> <p>惟 神 霊 幸 倍 坐 世。</p>	<p>我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。</p> <p>我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人の内よりよみがえり、天にのほり、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこよりきたりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。</p> <p>我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。</p> <p>アーメン</p>

『霊界物語』「山河草木（丑の巻）」第23章	『出エジプト記』20章（聖書協会共同訳）
<p>一 天津神天国常立之大神の 外に誠の神ありと思はじ。</p> <p>二 目に見えぬ神を誠の神として 敬ひまつれ諸々の民。</p> <p>三 徒に神の御名をは称へまじ 穢れ果てたる言霊をもて。</p>	<p>一 あなたには、わたしをおいてほかに神々があつてはならない。</p> <p>二 あなたは自分のために彫像を造つてはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水にあるものの、いかなる形も造つてはならない。それにひれ伏し、それに仕えてはならない。（以下省略）</p> <p>三 あなたは、あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。主はその名をみだりに唱える者を罰せずにはおかない。</p>

¹⁵ 「126日間」は出口王仁三郎が第1次大本事件で拘留された期間である。

<p>四 <small>きよ ひ すべ わざ やす</small> 清き日は総ての業を休らひて <small>かみ いづ うた ま</small> 神を斎きて歌へ舞へかし。</p> <p>五 <small>ち うへ なれ いのち なが</small> 地の上の汝の生命の永かれと <small>ちち はは かみ うやま</small> 父と母との神を敬へ。</p> <p>六 <small>こと いきものころ</small> よしもなき事に生物殺すなよ <small>みなあめつち みたま</small> 皆天地の身霊なりせば。</p> <p>七 <small>いたづら しら ひとこくみ なか</small> 徒に白日床組なす勿れ <small>かみ みわざ つと わす</small> 神の御業の勤め忘れて。</p> <p>八 <small>め ぬす たから ぬす ひ ぬす</small> 目を偷み宝を盗み日を窃む <small>ひと かみ つみびと し</small> 人こそ神の罪人と知れ。</p> <p>九 <small>いつは あかし た つみ</small> 詐りの証を立ててわが罪を <small>となり ひと めが</small> 隣の人に夢なきせまじ。</p> <p>一〇 <small>じんあい ころわす よ ひと</small> 仁愛の心忘れて世の人の <small>すべ わざ さまた</small> 総ての業の妨げなすな。</p>	<p>四 安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。 (以下省略)</p> <p>五 あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。</p> <p>六 殺してはならない。</p> <p>七 姦淫してはならない。</p> <p>八 盗んではならない。</p> <p>九 隣人について偽りの証言をしてはならない。</p> <p>一〇 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛とろばなど、隣人のものを一切欲してはならない。</p>
--	---

以上の対照表から明らかなように、王仁三郎は大本事件における受難をキリストの受難に重ね、自らを救世主と位置付ける。倫理観もモーセの十戒をはほ踏襲していることは明らかである。このような救済史観や倫理観は出口ナオの「お筆先」にも断片的な形では示されていたが、いまやキリスト教のそれを接木することでより体系的な姿で描き出す。この他にも、『創世記』の「アダムとエバの物語」に類似した「天足彦（あだるひこ）と胞場姫（えばひめ）の物語」¹⁶や、出口ナオをバプテスマのヨハネに、王仁三郎をキリストに類比させる物語など¹⁷、キリスト教の枠組みが随所に取り入れられている¹⁸。

¹⁶ 出口王仁三郎『霊界物語』第1巻「発端」

¹⁷ 同上第24章「神世開基（ヨハネ）と神息統合（キリスト）」

¹⁸ 出口王仁三郎がどのようにしてキリスト教を受容するに至ったかの詳細は以下を参照のこと。川島堅二「一神教と多神教のあいだ—大本教の可能性について」『理想』No. 688, 2012年所収

大本教の第一教典である「お筆先」と同じく第二教典『霊界物語』も登場する神々の名前は記紀神話を踏襲しているのに、表面的には連続性を保っているが、キリスト教の救済史観と倫理観が接木されることにより、実質は一新されたと言ってよい。

こうして教団は第一次大本事件の痛手を乗り越え急速に復興する。その教線は中国大陸も伺うほどになる。1925（大正14）年5月には、王仁三郎の提唱により、北京において世界宗教連合会の発会式が行われるが、そこにはキリスト教、イスラム、道院、道教、ラマ教、仏陀教、救世新教、普天教が参加している¹⁹。この発展は、1935（昭和10）年の第二次大本事件²⁰で当局により教団が解散されるまで続くことになる。

3. 大本教はキリスト教か？

3-1 近代のキリスト教系新宗教と大本教

このような大本教はいかなる意味でキリスト教であると言えるのか。

19世紀以降、世界の各地にキリスト教をベースにした新宗教が誕生する。代表的なものとして、アメリカではジョセフ・スミス・ジュニアによる末日聖徒イエス・キリスト教会（モルモン教）、チャールズ・テイズ・ラッセルによるものみの塔聖書冊子協会（エホバの証人）、朝鮮では文鮮明による世界基督教統一神霊協会（現在は世界平和統一家庭連合）、鄭明析による摂理（現在はキリスト教福音宣教会）などがあげられる。

これらキリスト教系の新宗教には共通点がある。それは聖書をベースとしつつ、教団独自の教典を編纂していることである。末日聖徒イエス・キリスト教会は『モルモン書』、ものみの塔聖書冊子協会は『新世界訳聖書』、世界基督教統一神霊協会は『原理講論』、摂理は「30講論」などである²¹。さらに、史的イエスを最終的な救済主とは認めずに、イエスの教えや行いを完成する新しい啓示（末日聖徒イエス・キリスト教会、ものみの塔聖書冊子協会）を説いたり、教団の創始者自らを再臨のキリストと主張したりする（世界基督教統一神霊協会、摂理）点も共通している。伝統的なキリスト教が、聖書のみを信仰と生活との唯一の正典（基準）とし、その聖書によって示されているイエス・キリストのみを

¹⁹ 『平和と一致』（宗）大本、1978年（非売品）p.82

²⁰ 1935年12月8日未明より、当時の内務省方針「邪教大本を地上から抹殺する」と1925年制定の治安維持法を根拠に、幹部・信者3,000名が検束、取り調べを受ける。教団施設はすべて解体され、墓地まで掘り起こされた。詳細は『大本七十年史下巻』p.313以下参照

²¹ 「30講論」以外は、市販されているか、各教団を通して容易に入手可能である。摂理の「30講論」は、日本人脱会者のノートに基づいて再構成された要旨を以下のウェブサイトから入手できる。
<http://religion.sakura.ne.jp/religion/>（川島堅二「宗教 & カルト情報」）

救世主とするのと対照的である。これらの新宗教が、伝統的キリスト教からは「異端」とされるゆえんでもある。

大本教は日本の記紀神話をベースにしている点で、これら近代のキリスト教系新宗教とは異なるが、少なくとも出口王仁三郎の自己理解と『霊界物語』の宗教的世界観の構造は非常によく似ている。既述したように王仁三郎はキリスト教の使徒信条に基づいて、自らを受難の救世主に位置付けている。大正14年に出版された王仁三郎の歌集『道の栞』には、このようなメシア意識が如実に謳われている²²。

「釈迦基督孔子等は世の^{すくいびと}救人なり。救主^{すくいぬし}には非ざるなり。国家のために功績を立てし人々もまたこれ世の救人なり」
 「^{みず}瑞の^{みたま}霊の救い主（王仁三郎のこと）、ふたたび世に下りて、救いの道を開きたまえり」
 「天津罪、国津罪、^{こことたく}許々多久の罪の贖い主は、^{すさのおのみこと}素戔鳴尊の瑞の霊なり」
 「故^{ゆえ}に人々の一代かかりても贖い尽くし得ざるところの余れる罪は、この神の御名によりて贖われ許さるべし」

3-2 「異端」の再定義と大本教

19世紀以降現れたキリスト教系の新宗教とともに、大本教をキリスト教に接合することのできる神学思想があるとすれば、それは近代神学の祖フリードリヒ・シュライアマハーの宗教論である²³。そこにおいて「異端」という概念の再定義がなされた。彼は言う「固有の成立宗教は全体との関係において一つの異端である。なぜなら最高度に恣意的なものが、その成立原因なのだから」と²⁴。ここには、キリスト教も含めすべての宗教は新旧を問わず、「異端」として等価値なものとする考え方が示されている。このような思想によれば、神の啓示は聖書で完結することはあり得ない。そもそも聖書を含む宗教の聖典なるものはただの「霊廟」に過ぎない。「かつてはそこに偉大な精神があったとしても、いまはもうそこにはなく、それは単なる記念碑に過ぎない」。したがって「聖典を信じる人が宗教を持っているのではなく、聖典など必要とせず、自分でそれを作れる人が宗教を持っているのだ」といわれる²⁵。

²² 出口王仁三郎『道の栞』復刻第2版、平成15年（みいづ舎）p. 127

²³ シュライアマハー宗教論の現代的意義については拙稿「近現代の「福音」 佐藤司郎・吉田新編『福音とは何か—聖書の福音から福音主義へ』教文館2018年p. 232-253参照

²⁴ Schleiermacher, F. "Über die Religion" Berlin. Bei Johann Friedrich Unger. 1799. S. 260f.

²⁵ 同上書 S.121f.

以上のような意味において、聖書に満足せず、自らに示された固有の啓示（シュライアマハーの言葉では「宇宙の直観」）にしたがって、新たな教典を編んだのがジョセフ・ミス・ジュニアでありチャールズ・テイズ・ラッセルであり文鮮明、鄭明析である。その系譜に出口王仁三郎も位置付けることができるだろう。

4 おわりに

武田清子は「日本におけるキリスト教の受容には、どのような形態が見られるであろうか」と問い、次の五つの型が見られるように思うと述べている。すなわち、第1に「埋没型（妥協の埋没）、第2に「孤立型（非妥協の孤立）」、第3に「対決型」、第4に「接木型あるいは、土着型（対決を底にひそめつつ融合的に定着）」、第5に「背教型（キリスト教を捨て、あるいは、教会に背き、いわゆる背教者になること、あるいは、そのことによって逆説的にキリスト教の生命の定着を求める）」。

そして、とくに第4の型について「それは一粒の麦のたとえのように、また、『地の塩』のたとえ、あるいはパン種のたとえのように、その種まかれた土壌の中に深く身を没し、自らを失うように見えながら、その土壌の本質をゆすぶり、新しい価値をもって対決することを通して、その土壌のふところから新しい生命が芽生え、その生命を原動力とした新しい文化、新しい思想、新しい生活が育ってゆくことを意味すると思う」という²⁶。

はたして前項で名を挙げたキリスト教系の新宗教及び大本教は、この武田によるキリスト教受容の第4類型「接木型」「土着型」に分類することができるだろうか。いずれも今日の日本で相当数の信者を擁する教団になっているが、はたしてそこから「新しい文化、新しい思想、新しい生活が育って」いるだろうか²⁷。分類の成否はこの点の評価にかかっているといえるだろう。たとえばものみの塔聖書冊子協会の信者による良心的兵役拒否の実践などはそのようなものとして真っ先に評価すべき事柄であろう²⁸。しかし、ここではとくに大本教にフォーカスして考えてみたい。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは、暴力的志向を持つ一神教的な「あれか、これか」を、「あれも、これも」という混交主義的な寛容によって相対化し、掘り崩し、切っ

²⁶ 武田清子前掲書 p. 4-5.

²⁷ これらキリスト教系の新宗教において靈感商法や児童虐待、教祖による性犯罪など深刻な人権侵害を指摘されてきたことは忘れてはならない。

²⁸ 稲垣真美『兵役を拒否した日本人—灯台社の戦時下抵抗』岩波新書 1972年に詳しい。

先を丸めていくことはできないだろうかと問うている²⁹。前世紀末のオウム真理教事件、そして今世紀初年の9・11米国同時多発テロを経験した私たちにとって宗教原理主義の暴力とその根底にある排他性を克服することは緊急の課題である。大本教の歴史と実践はこの課題解決への提案であるように思われる。

大本教の草創期、出口王仁三郎が北京において世界宗教連合会の発足を提唱したことは既述したが、こうした実践を支えているのは王仁三郎の「万教同根」の思想である。また王仁三郎は「芸術は宗教の母」とも主張し、書画や陶器制作、お能などの伝統芸能を、宗教的教義を超えるより普遍的活動と位置付けて実践した。大本の布教とは教団の拡大が第一義的なことではない。同じ教団組織に属さなくても、宗教の所属が異なっても、より普遍的な次元（芸術）において和合することができる。なぜならすべての宗教の根は同一だからという考えである。

こうした思想は今日に至るまで大本教団におけるさまざまな独創的な活動に結実している。とりわけ注目に値するのがキリスト教やイスラム教との交流である³⁰。1977年2月には聖公会の司祭を綾部の大本本部に招いて合同礼拝を実施。さらに1982年5月には大本教団の幹部がニューヨークの聖ヨハネ教会（聖公会）を訪ね、そこで合同礼拝を実施する。ここで重要な点は大本教とキリスト教という異なる宗教の合同礼拝だということだ。異なる宗教間での対話は、これまでにいくつも前例がある。しかし、異なる宗教の聖職者が同時に一つの聖壇に立ち、合同で礼拝するという試みは前代未聞の出来事である。

そして極めつけは1991年シリアのイスラム最高指導者（グラドムフティ）クフタロウ氏の招きにより、大本教団幹部3人がイスラムの聖地メッカ巡礼を果たしたことだ。クフタロウ氏は「大本は日本のイスラム」と述べ、大本の信者がイスラムに改宗することなくメッカ巡礼へと招いたのだった。

このような実践を可能とする大本教の神学についてはすでに別に書いているのでここで述べることはしないが³¹、まさにこれはベックのいう「あれか、これか」ではなく「あれも、これも」の混交主義であり、日本に土着した「キリスト教」としての大本教が示す「新しい文化、新しい思想、新しい生活」であることは間違いのないと思われる。それは他宗教がもはや改宗の対象ではあり得ないし、あるべきでもないポストコロニアリズムにおける宗教の布教、伝道、宣教に豊かなビジョンを提供するものなのである。

²⁹ ウルリッヒ・ベック（鈴木直訳）『〈私〉だけの神 平和と暴力のはざまにある宗教』岩波書店 2011年 p. 95

³⁰ 大本本部編 “Bankyo Dokon Seventy Years of Inter-Religious Activity at Oomoto”, 1977 参照

³¹ 前掲拙稿（2012年）参照